

化学療法開始時には必ず、  
HBs抗体、HBe抗体を調べること  
↓  
抗体陽性の場合は  
HB-DNAを毎月測定  
↓  
DNA陽性化したらエンテカビル投与

### どういうときに抗癌剤を投与してよいか

- ・3週毎投与のときは好中球 $1,500/\mu\text{L}$ 以上
- ・毎週投与のときは好中球 $1,000/\mu\text{L}$ 以上  
- 血液の回復のときは単球が増える
- ・GOT/GPTは200未満
- ・有熱の感染がないこと
- ・PS 0-2

### G-CSF使用のときの基本

- ・抗癌剤と同日に投与するのは禁忌
- ・白血球が増えすぎると  
- 腰痛をうつたえることがある  
- 間質性肺炎を助長することがある

### おさえるべきポイント

- ・下痢+発熱性好中球減少は要注意  
- 治療関連死につながる
- ・感染源の問診が重要  
- 肺感染症、腎孟炎、胆囊炎、う歯、痔
- ・発熱すると血小板は消費される

**乳腺化学療法科 看護師電話対応**  
 ◆持続が長い場合は内服する。  
 お詫びは一緒に、各担当リサーチナースへ電話をほわす  
 (内服する場合は内服熱剤一晩前まで)  
 【ポイント】  
 ※3.8℃未満でも感染症状が疑われる場合は、内服するよう説明する。  
 ※抗生剤(バナ等)は内服し始めたら、解熱しても続けて3日間は内服するよう説明する。  
 家族より電話が来たら、正確な状態を把握するために本人に代わってもらう。  
 今日以上の発熱が3日以上続いている場合は、当院もしくは連携病院を受診するよう説明する。  
 (本人が変われないくらい直立が高い場合は  
 胸団車をみてちょっとよに説明する。)



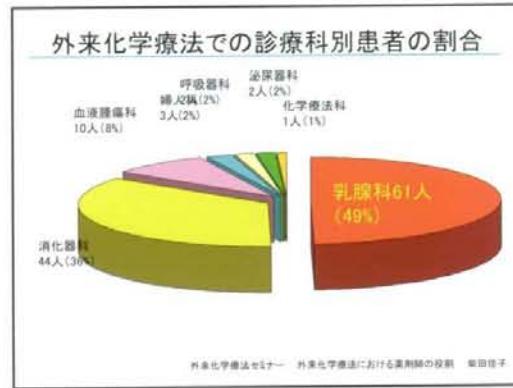
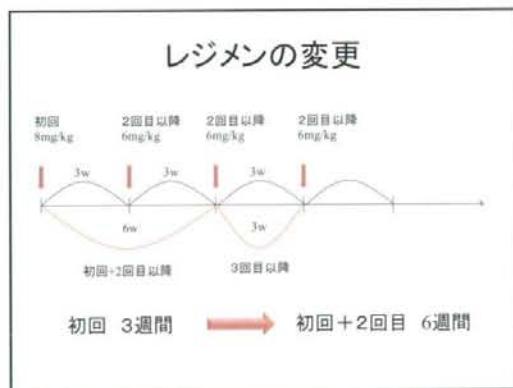
◆いつから併用があるのか  
 電話日より発熱がある場合は、抗生剤を3日間内服するよう説明。  
 3日間内服して解熱がみられない場合は午前中に連絡をするよう説明する。

◆抗生剤は内服しているのか  
 内服していない場合は内服するよう説明。  
 抗生剤(バナ等)は内服し始めたら、解熱しても続けて3日間は内服するよう説明する。

内服してもなおかつ38℃以上発熱が3日以上続く場合は、当院もしくは連携病院を受診するよう説明する。

◆痛み止め(鎮痛下熱剤)の併用  
 ポルタレン、ロキソニンなどの鎮痛解熱剤は熱をただ下げるだけなので抗生剤を併用するよう説明する。

※症状が改善しても3日間後に電話連絡するよう説明する。  
 (内容はすべて電子カルテに残す)



### 対策は

- ・チーム診療
- ・患者を4つに分類
- ・レジデントによる外来予習

### 効率化、チームプレイ、教育





カルテに簡単に記載

【患者開始日】:2007年03月15日  
【コース番号】:008

固有ID:【カクレヌート】1000/03/15/008 乳癌II 患者

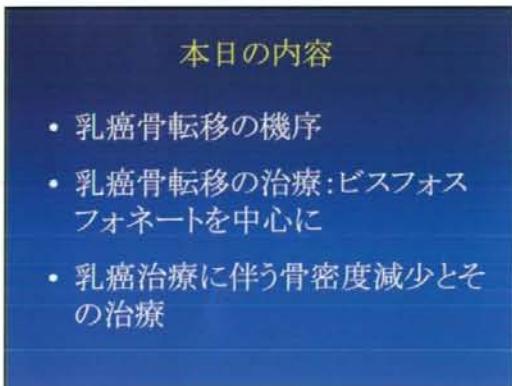
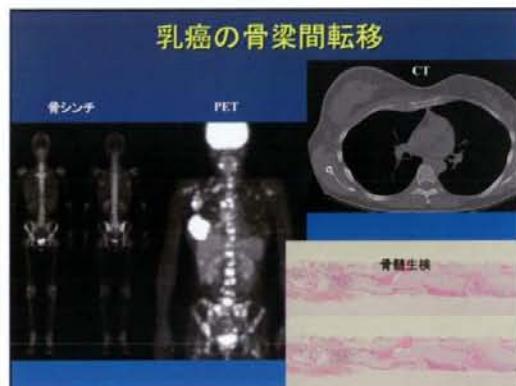
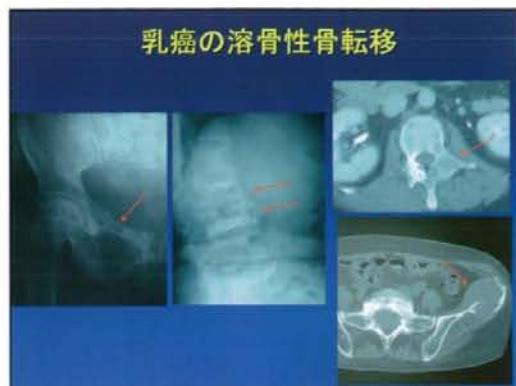
予算  
M 右乳 痢 治 N81-2 meta(5.1%)  
ノカルビンとメタを含めて、2週に回とする。  
計画 3月1日 N81(±700) ノカルビン  
固有ID:【カクレヌート】1000/03/15/008 乳癌II 患者

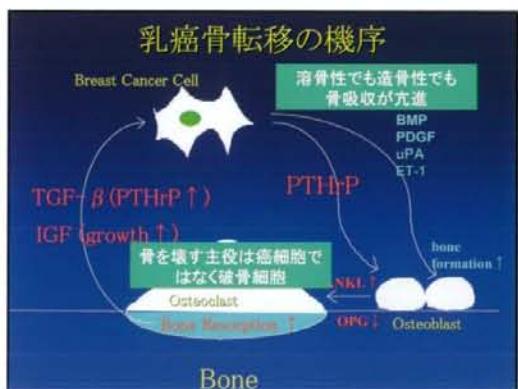
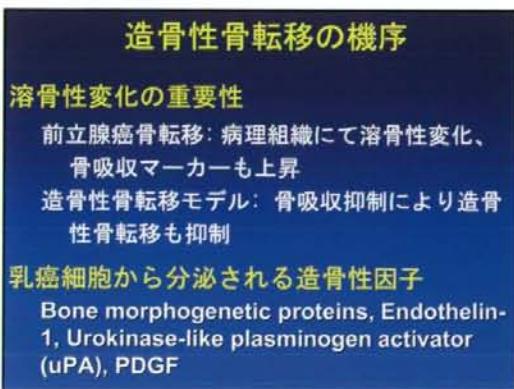
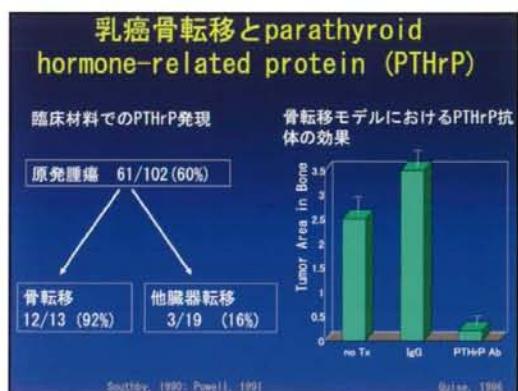
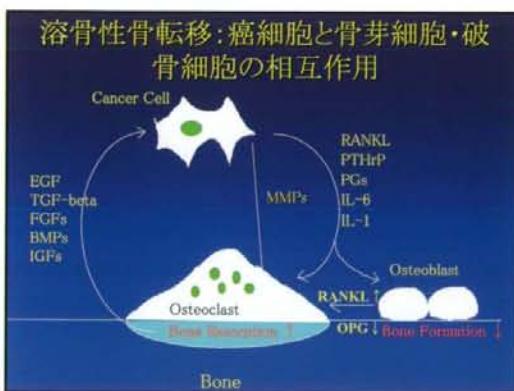
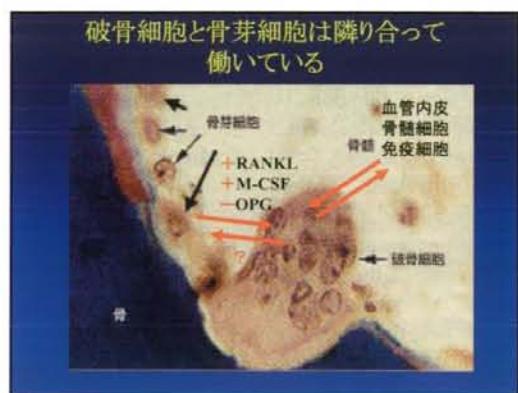
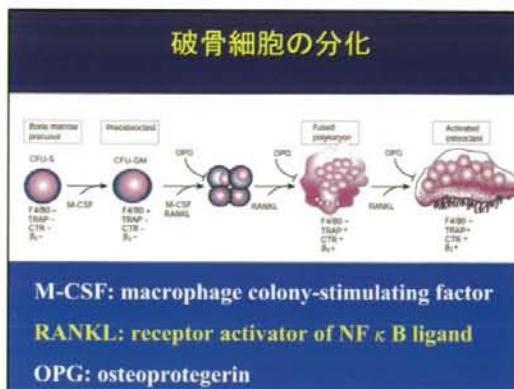
M1症例で右局所、肝、骨に病変があり、  
ナベルビンとメタ点滴を実施している。

3月1日にナベルビンとメタ予定。

電子カルテは  
チーム医療に極めて有用な  
道具だ！

即座に確実な情報を共有できる





### 骨髄微小転移 (disseminated tumor cells, DTC)

- 早期癌でも高頻度に骨髄微小転移が存在
 

Breast 20-40%, prostate 20-30%, lung 40-60%, gastric 35-60%, esophagus 30-40%, colorectal 20-30%, head and neck 20-30%
- Meta-analysis of 4703 breast ca pts: DTCは独立した予後不良因子
 

(Braun, NEJM 2005)

どのような状況でDTCが骨転移を形成するかは不明

Months after Surgery	No micrometastasis (%)	Micrometastasis (%)
0	100	100
30	85	75
60	75	65
90	65	55
120	55	45

### 骨髄微小転移 (disseminated tumor cells, DTC)

DTC は cancer stem cell の性格を持つ
 

(Balic, Clin Cancer Res 2006)

- CK19+, CD24-/44+, epiCAM+, MUC1-
- Response and secretion of FGF-2
- Correlation of DTC and relapse rate, long term persistence
- Low sensitivity for systemic chemotherapy
- Adjuvant chemotherapy did not decrease DTC in BM
 

(Braun, JCO 2000)
- molecular target therapy?
- Endocrine therapy?
- Trastuzumab?
- Bisphosphonate? (Diel, NEJM 1998)

### 乳癌骨転移の合併症

(癌研 N=256, FOLLOW-UP 1184 days)

合併症	割合
骨痛	77.5%
骨折	39.2%
神経麻痺	9.8%
(高カルシウム血症	40.9%)
骨へのX線照射	60.6%
骨の手術	1.2%

→ 骨合併症をどうやってコントロールするか?

### 骨転移の治療

- 化学療法
- 内分泌療法
- 放射線療法
- 外科療法
- 骨特異的治療
- Bisphosphonates**
- RANKL Ab
- PTHrP Ab
- Radioisotope (<sup>89</sup>Sr, <sup>153</sup>Sm-EHDP)

### 骨転移の治療: 放射線照射による疼痛管理

70-80%で疼痛改善

疼痛改善は癌種、照射dose、照射スケジュールとあまり相關しない

———腫瘍細胞抑制によるのではない?

- ・破骨細胞の抑制?
- ・骨芽細胞機能の抑制?
- ・疼痛受容体の抑制?

### 骨転移の治療: 放射線照射

単回照射 8 Gy vs 分割照射 24Gy (Netherlands)  
same OS and same QOL-adjusted OS  
cost: \$2438 vs \$3311  
van der Haut, JNCI 2003

単回照射 8 Gy vs 分割照射30Gy (RTOG)  
grade 2-4 acute toxicity: 10% vs 17%  
CR, PR: 15%, 50% vs 18%, 48%  
Subsequent fracture: 5% vs 4%  
Hartsell, JNCI 2005

## 骨転移に対する手術:目的

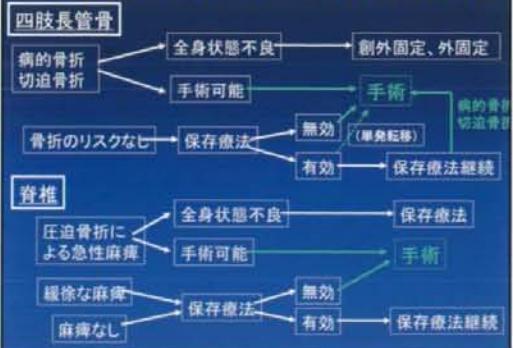
### ・QOL (Quality of Life)の改善

疼痛改善、支持性、運動機能の維持

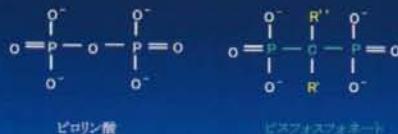
- 四肢:骨折または骨折リスク大(Mirels scoring system, etc.)
- 椎体:脊髓圧迫、保存的治療無効時

・局所の腫瘍を制御→QOL維持、生存期間延長に貢献?

## 骨転移治療のフローチャート(手術を中心に)



## Bisphosphonates



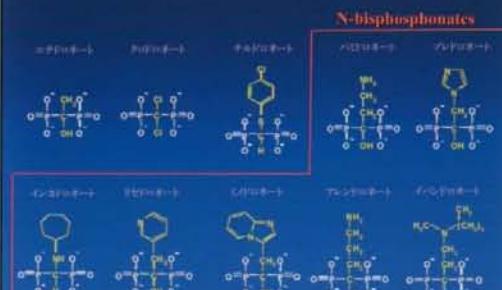
P-C-P: Bone Hook, binding to hydroxyapatite

R<sup>\*\*</sup>: determines potency

細胞膜を通してにくい→経口吸収少ない、細胞内に入りにくい

骨へ特異的に吸着(≥60%)→骨吸収により破骨細胞内へ

## ビスfosフォネートの構造

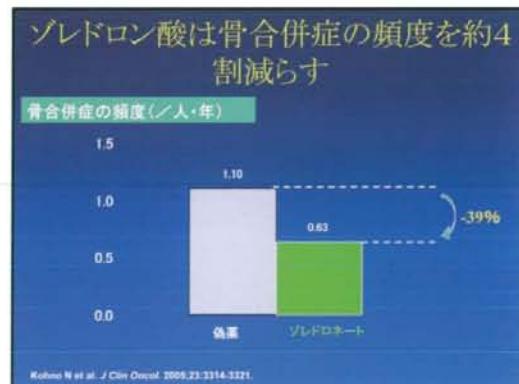
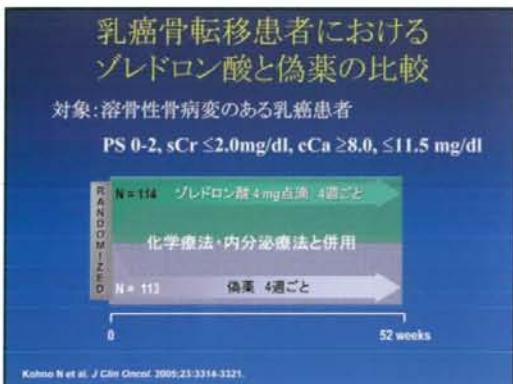
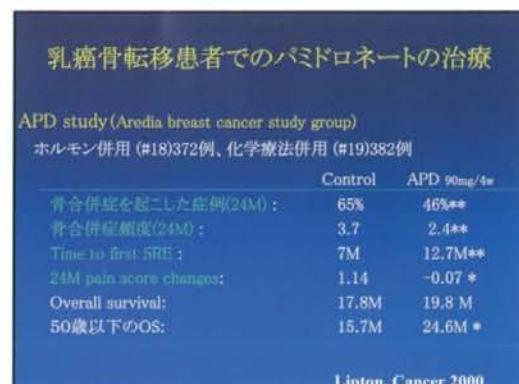
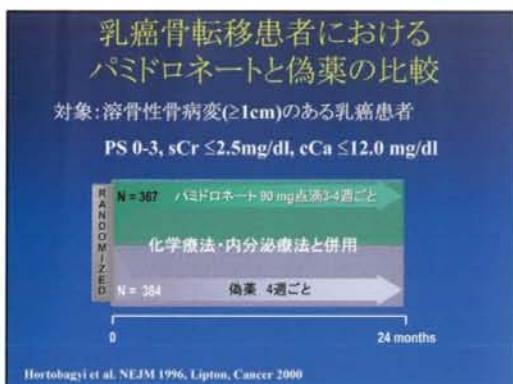
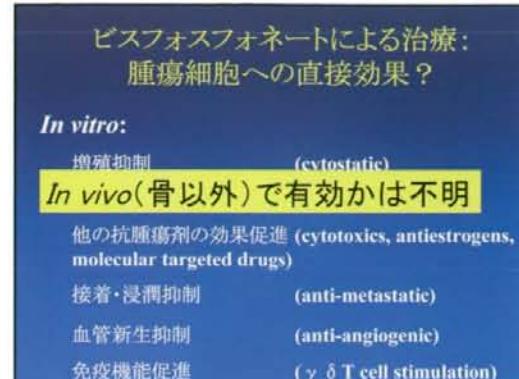
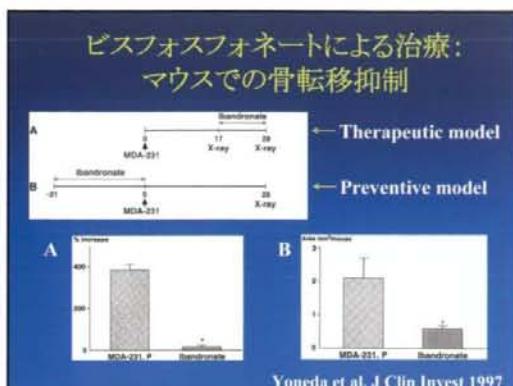


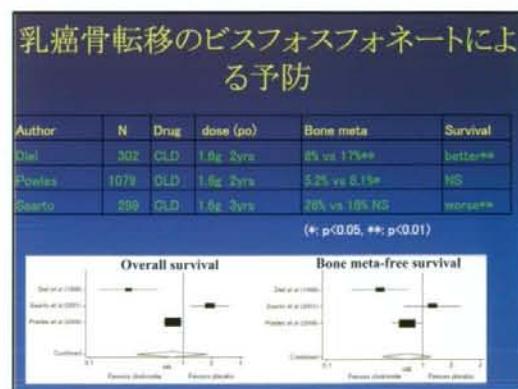
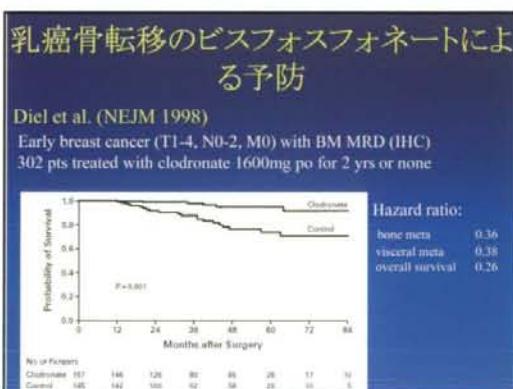
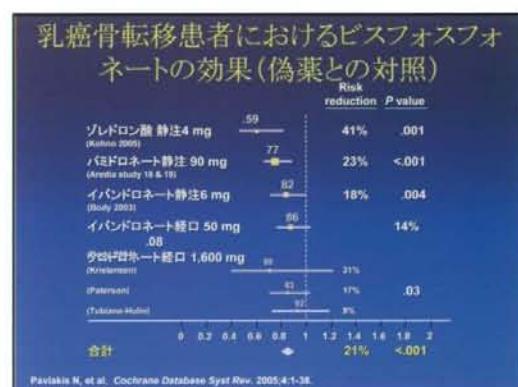
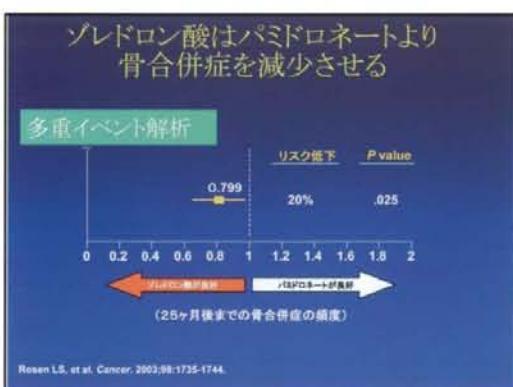
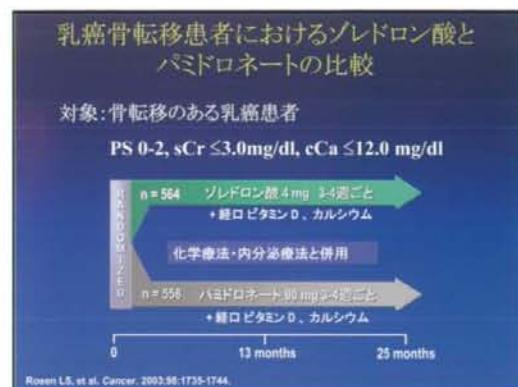
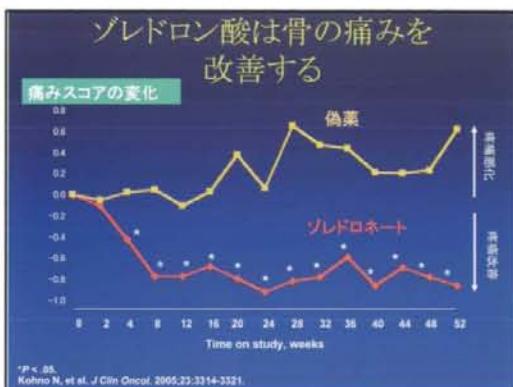
## N-bisphosphonatesの分子作用機序 (Mevalonate pathway)

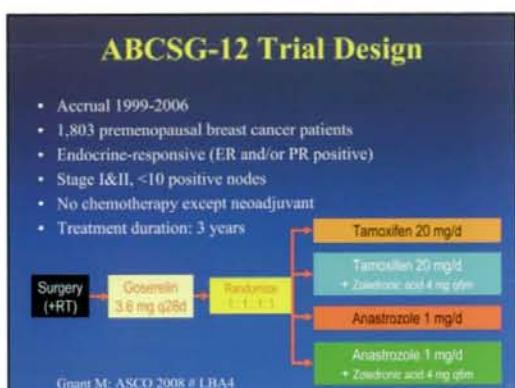


## 骨転移におけるビスfosフォネートの作用機序

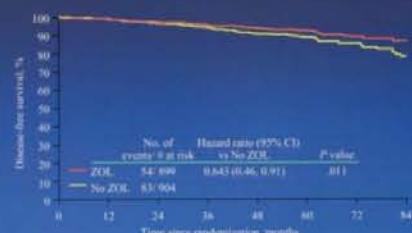




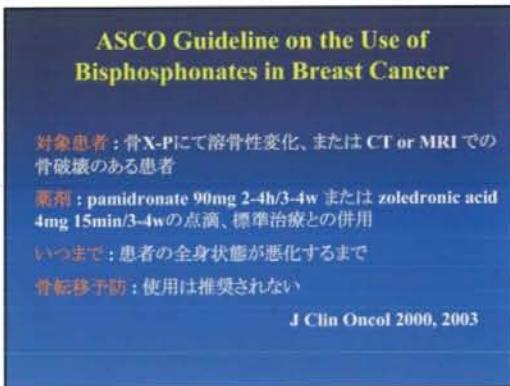
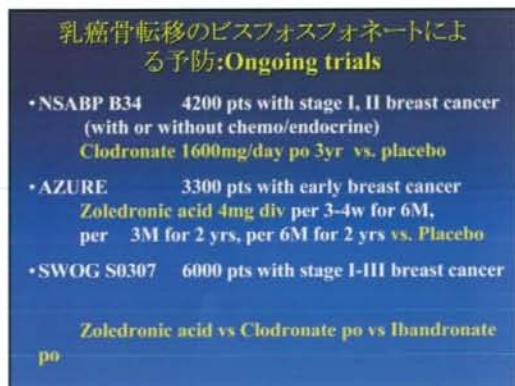
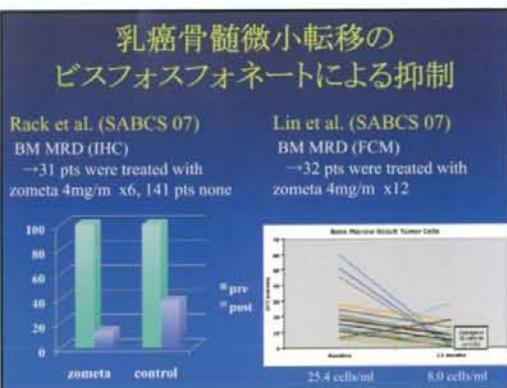
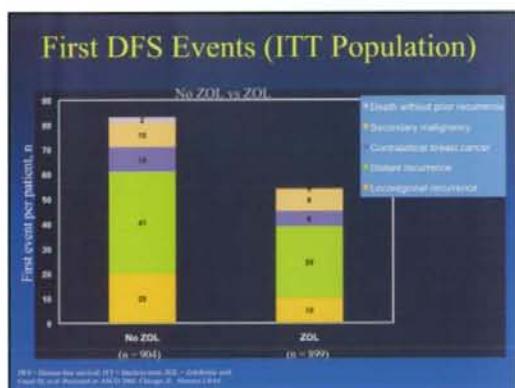




### Primary End Point : Disease-Free Survival Zoledronic Acid Significantly Improves DFS



Grant M: ASCO 2008 # LBA4



静注ビスフォスフォネートの副作用				
<b>急性期反応:</b> 数%、1,2日目のみ(特に第1回点滴で)				
微熱、頭痛、食欲低下、脱力、骨痛の一時的悪化				
<b>低カルシウム血症:</b> 臨床的に問題になることはすくない				
前立腺癌では時に著明低下→ビタミンD、カルシウム併用				
<b>腎障害:</b> 偽薬との比較で増加なし				
用量・速度による				
<b>頸骨壞死(Osteonecrosis of Jaw, ONJ):</b> 長期使用で問題				

ビスフォスフォネートの副作用:	
<b>頸骨壞死(osteonecrosis of jaw, ONJ)</b>	
	歯肉の痛み、腫脹、感染、膿漏→上頸・下頸骨の露出
	多くは以前の抜歯部位に出現
	Working diagnosis of ONJ: 適切な評価、治療後も6週以上治癒しない ・頸骨転移、放射線骨壊死がない

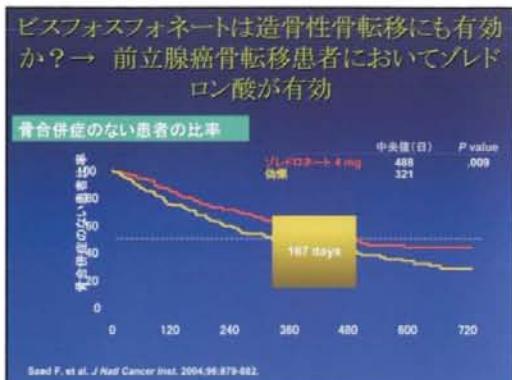
ONJ: 頻度				
STUDY	Study type	Pts treated w BP, n	Pts w Suspect or Proven ONJ, n	Frequency (%)
Hoff et al MDACC ASCO 2006	Chart review	4,019	34	.8%
Durie et al	Web-based survey	1,203	152	12.6%
Pozzi et al Italian Multicenter study	Chart review	888	16	1.8%
Badros et al	Chart review/observational	340	11	3.2%
Tosi et al Analysis of Bologna 2002 trial	Retrospective review of trial database	259	6	2.7%
Dimopoulos et al	Chart review	202	15	7.4%
Cafro et al	Chart review	118	14	11.9%

ONJ: 頻度、危険因子	
MD Andersonがんセンター retrospective survey	
1996-2004	4025例カルテ→31例除外、3994 pts
頻度: 確定29、疑い7 (0.8%)	
乳癌16/1338 (1.2%)、骨髓腫 2.4%	
ビスフォスフォネート暴露期間、量:	
5.8yrs、pamidronate 1800mg、zoledronate 80mg	
リスク因子: ER(+) 15.5、拔歯 156.4、pamidronate to zoledronate 17.26、Z only 5.58	
経過: 1例で治癒、他は頸骨露出不変(症状はコントロールされる)	
ASCO 2006	

ONJ: 対策	
予防:	
歯科、口腔外科との緊密な連携	
口腔衛生、BP治療前に歯科治療を	
BP治療中は観血的歯科治療を避ける	
治療:	
さらなる骨損傷を避ける	
抗生素質は有効なことあり	
BPs中止による改善は認められていない	

ASCO Expert Panel Recommendations, 2004

Bisphosphonates in Breast Cancer: Further Questions	
・造骨性骨転移には有効か?	
・治療の適応、タイミング	
・特にBisphosphonates使用のメリットがある患者を予測できるか?	
・腫瘍量が少ない症例の適応は?	
・Bisphosphonates使用中にSkeletal eventsが起きたときには継続すべきか?	
・骨転移のコントロールが良好な場合継続すべきか?	
・New drugs other than Bisphosphonates?	



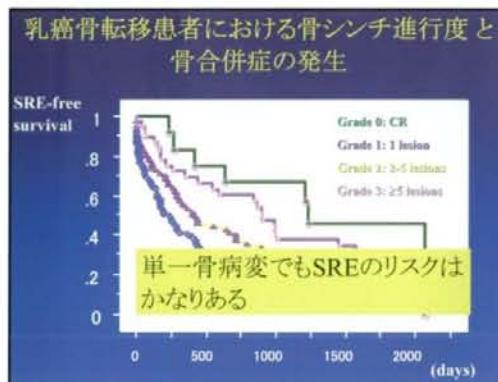
ビスフォスフォネートが有効な患者を予測できないか? —骨合併症のリスク因子

骨のみの転移患者: risk factor of RT for pain / cord compression

Plunket, Eur J Cancer 2000

骨転移の進行度(骨シンチ)

骨代謝マーカー



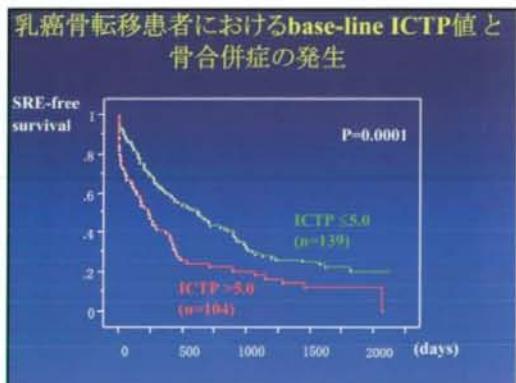
骨代謝マーカー

骨吸収マーカー: 残留type I collagen 分解産物

urine free/total deoxypyridinoline (DPD), pyridinoline (PD)  
urine/serum C-telopeptides of type I collagen (CTX)  
N-telopeptides of type I collagen (NTx)  
serum carboxy-terminal telopeptide of type I collagen (ICTP)  
tartrate-resistant acid phosphatase (TRAP)

骨形成マーカー: 骨芽細胞の分化に伴う分泌物

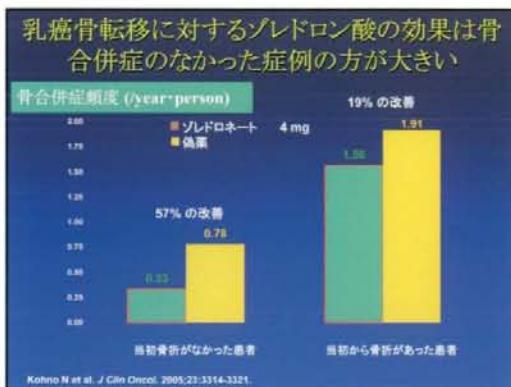
serum procollagen type I C-terminal propeptide (PICP)  
bone-specific alkaline phosphatase (BAP)  
osteocalcin (OC)



骨腫瘍量が少ないときのビスフォスフォネートの適応は?

- 骨転移のstaging別のビスフォスフォネート効果のデータはない

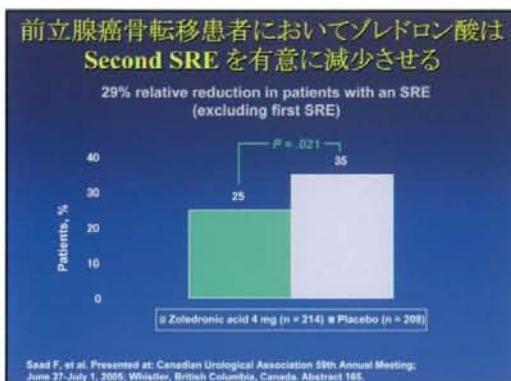
- 症状がないときにビスフォスフォネートを開始した方が効果は高い



ビスフォスフォネート使用中に骨合併症が起きたときには継続すべきか？

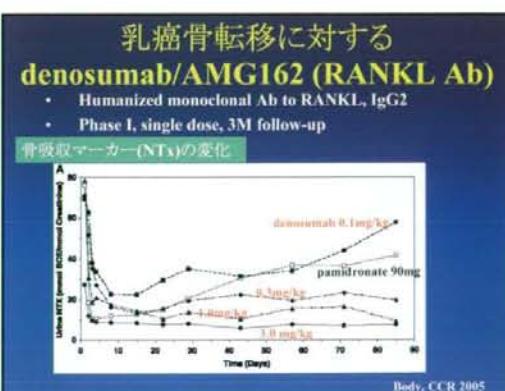
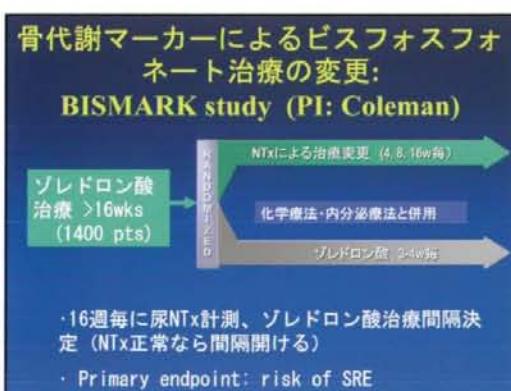
- ビスフォスフォネート使用中にeventが起きた後、継続投与の有効性prospectiveに検討したstudyはない

- すでにskeletal eventsを起こしている患者へのビスフォスフォネート投与は有効

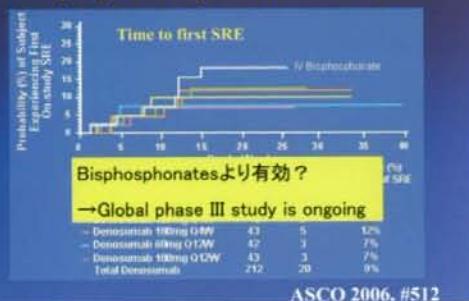


骨転移がコントロールされているときにビスフォスフォネート治療は継続すべきか？

- 骨がPR・コントロールされている時に治療を継続vs休止の比較試験のデータはない
- 化学療法の継続vs休止については継続した方が生存期間が伸びる
- 骨代謝マーカーが低下しているときは骨合併症のリスクは低くなる



### Randomized phase II study of Denosumab vs BP in pts previously not treated with BPs

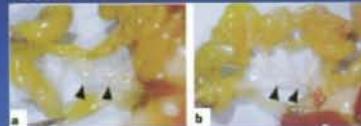


### RANKL/RANKはリンパ系分化に重要 RANKL/RANK knockout mouse:

骨大理石症(破骨細胞欠除)

リンパ節欠除、脾臓でのB細胞減少

胸腺、バイエル板は正常



mesenteric LN in wild(a) and RANKL KO (b) mice

Kong, Nature 1999; Dougall, Genes & Development 1999

→Adultでは?

### ビスフォスフォネート以外の骨特異的薬物治療の可能性: 動物実験レベル

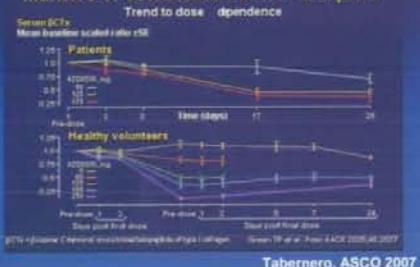
- PTHRP 発現阻害剤
- TGF- $\beta$  receptor阻害剤
- COX2阻害剤
- Src 阻害剤
- Cathepsin K阻害剤
- Integrin阻害剤( $\alpha V, \beta 3$ , others)

### SRC阻害剤



### Src 阻害剤による骨吸収抑制

AZD0530 caused a significant decrease in markers of osteoclastic bone resorption



### Strontium-89による骨痛の治療

$^{89}\text{Sr}$ : 生体内でカルシウムと同じ動態→骨基質に沈着  
50%が骨に集中、尿排泄  
半減期 50.5d,  $\beta$  energy 1.46MeV, max range 7mm

鎮痛効果

CR 32%, RR 76%

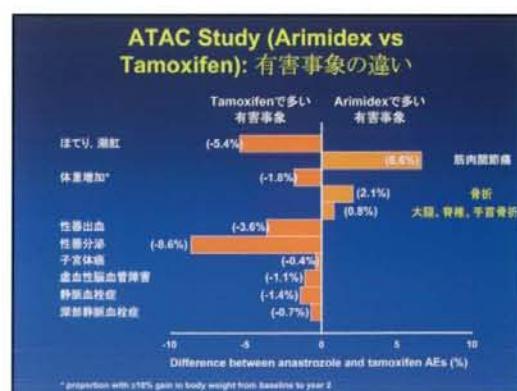
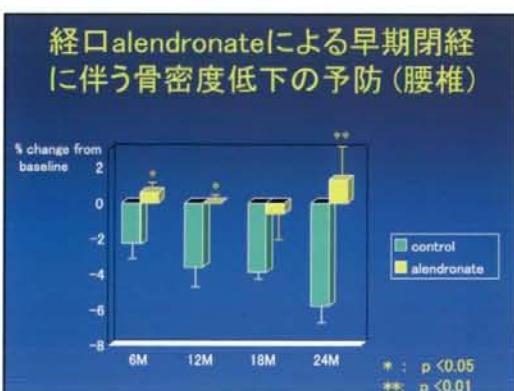
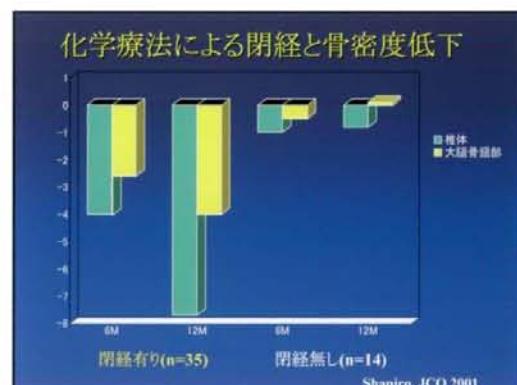
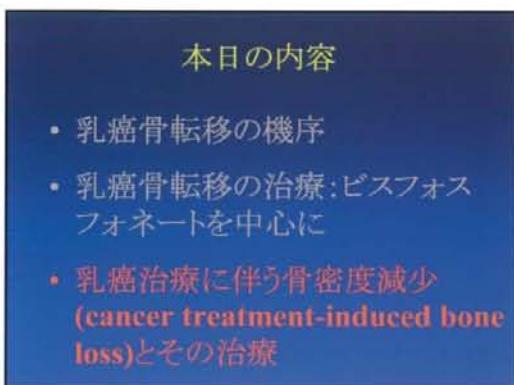
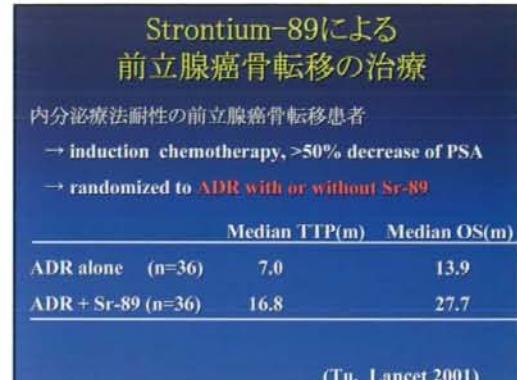
鎮痛期間: start 4-28d, duration ~15m

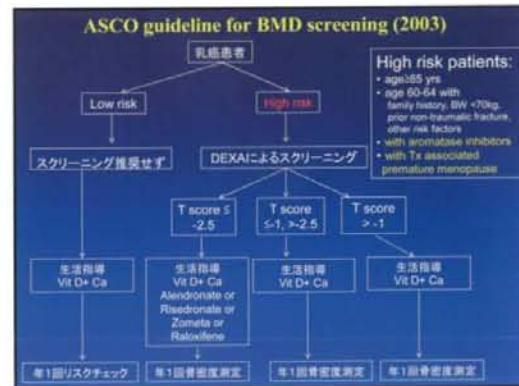
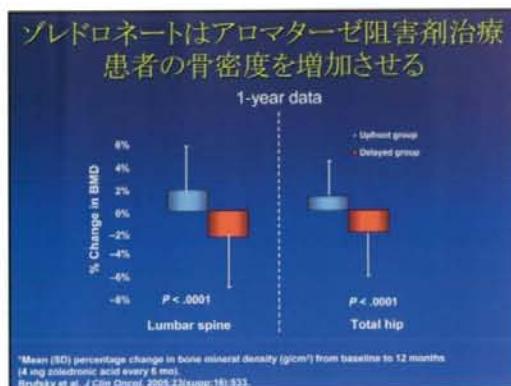
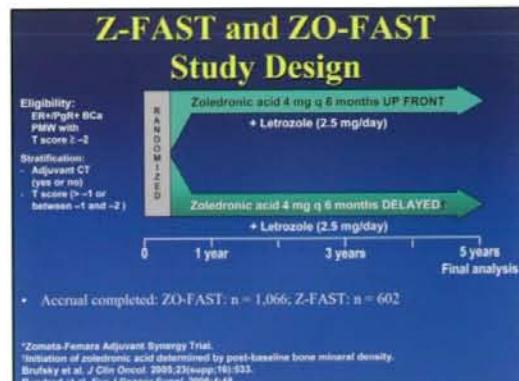
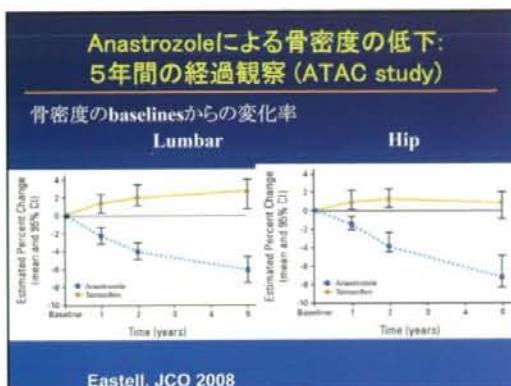
鎮痛剤の減量: 71-81%

血液毒性

白血球減少 12-80%, 血小板減少 29-80%

Finlay, Lancet Oncol, 2005





## 42 転移・再発乳癌に対するvinorelbine単剤とvinorelbine/trastuzumab併用療法

転移・再発乳癌に対するvinorelbine単剤と  
vinorelbine/trastuzumab併用療法

癌研有明病院化学療法科  
徳留なほみ

CANCER INSTITUTE HOSPITAL  
Division of Medical Oncology / Breast Oncology

ナペルビン(vinorelbine)について

1979年にフランスでマダガスカル島産ニチニチソウの茎、葉、根から抽出した成分から半合成されたビンカアルカロイド誘導体(ex:ビンクリスチン、ビンプラステン、ビンデシン)。

有糸分裂微小管の構成蛋白質チュブリンに選択性的に作用し、その重合を阻害することにより抗腫瘍効果を示す。神経毒性は細胞微小管に比べ、有糸分裂微小管の重合をより強く阻害することによって少なくなったと考えられている。

2005年5月31日 乳癌が追加承認

CANCER INSTITUTE HOSPITAL  
Division of Medical Oncology / Breast Oncology

転移性乳癌に対するナペルビン単剤投与の成績

1st line

報告者	症例数	投与方法	奏効率 (%)	CR率 (%)	生存期間中央値 (ヶ月)
Pamidieu	145	30 mg/m <sup>2</sup> /週	41	7	18
Romano	44	30	41	7	-
Bruni	63	30	44	8	11.7
Twelves	34	25	50	6	10
Garcia-Conde	59	30	50	2	15
Conobbio	26	30	46	19	-
Vogel	56	30	38	4	-
Weber	60	30	35	15	15.7

CANCER INSTITUTE HOSPITAL  
Division of Medical Oncology / Breast Oncology

転移性乳癌に対するナペルビン単剤投与の成績

2nd line以降

報告者	症例数	投与方法	前治療でのアンテラーアイクレ治療量 (mg/m <sup>2</sup> /週)	奏効率 (%)	CR率 (%)	生存期間中央値 (ヶ月)
Weber	47	30	0	32	6	14.5
Gasparini	67	20~25	45	36	4.5	13.5
Livingston	40	30~35	100	25	5	8
Desgrange	100	30	100	16	1	18.3
Jones	115	30	100	16	5	8.1
Udom	20	25 biweekly	95	35	0	-
Zelen	40	30	81(タキサ+100%)	25	0	6
Tominaga	65	15~25	94(タキサ+100%)	20	0	-
Tominaga	80	20	55	30	4	-
Sarki	50	25(day 1,8)	100(タキサ+100%)	20	0	-

CANCER INSTITUTE HOSPITAL  
Division of Medical Oncology / Breast Oncology

トラスツズマブと併用するのに最も適した抗癌剤は?

In vitro study

- 相加的 : アンスラサイクリン、パクリタキセル、メトトレキセート
- 相乗的 : ドセタキセル、プラチナ製剤、ナペルビン、チオテバ、エトホシド

In human study

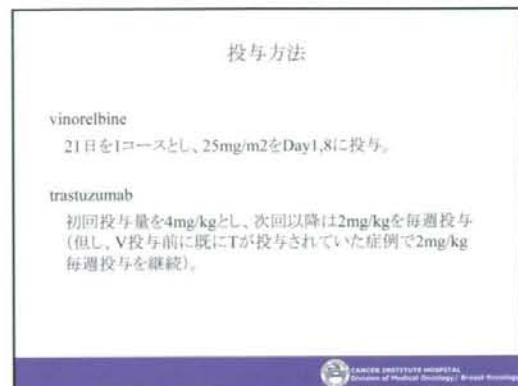
PAC+H :	RR 40%	TPP 7M
DOC+H :	RR 60%	TPP 9M
VLB+H :	RR 70~80%	TPP 6M
taxane+platinum+H :	RR 50~80%	TPP >12M

CANCER INSTITUTE HOSPITAL  
Division of Medical Oncology / Breast Oncology

ナペルビンとトラスツズマブ併用療法の成績

報告者	症例数	投与方法	HER2	奏効率 (%)	CR率 (%)
Burstein	40	T(4mg/kg→2mg/kg/週)+VNR(25mg/m <sup>2</sup> /週)	All IHC2+ IHC3+	75 60 80	8
Jahanzeb	40	T(4mg/kg→2mg/kg/週)+VNR(30mg/m <sup>2</sup> /週)	All IHC2+ IHC3+	78 58	11
Burstein	54	T(4mg/kg→2mg/kg/週)+VNR(25mg/m <sup>2</sup> /週)	All IHC3+ FISH+	68 68 70	7
Suzuki	24	T(4mg/kg→2mg/kg/週)+VNR(25mg/m <sup>2</sup> /週)	All	42	8

CANCER INSTITUTE HOSPITAL  
Division of Medical Oncology / Breast Oncology



患者背景		
	V単剤群	V+T併用群
症例数	80	50
年齢	中央値 54.5 (29.79) < 60 56 (70.0%) ≥ 60 24 (30.0%)	54.2 (29.73) 32 (64.0%) 18 (36.0%)
臨床診断名	進行乳癌 8 (10.0%)	11 (22.0%)
臨床診断名	再発乳癌 72 (90.0%)	39 (78.0%)
症例型	軟部組織転移症例 37 (46.3%)	28 (56.0%)
症例型	骨転移症例 49 (63.8%)	28 (56.0%)
症例型	内臓転移症例 69 (86.3%)	38 (76.0%)
病果部位 (臓器)	1 2 3 4 ≥ 5	11 (13.8%) 17 (21.3%) 18 (22.5%) 18 (22.5%) 16 (20.0%)
病果部位 (臓器)	7 12 12 (24.0%) 11 (22.0%) 8 (16.0%)	7 (14.0%) 2 (4.0%) 0.0%

患者背景		
	V単剤群	V+T併用群
再発に対する 化療レジメン数	0 1 2 3 4 ≥ 5	4 (5%) 8 (10.0%) 12 (15.0%) 28 (35.0%) 13 (16.3%) 15 (18.8%)
再発に対する anthracycline 治療歴	あり なし	9 (18.0%) 7 (14.0%)
再発に対する taxane治療歴	あり なし	11 (22.0%) 10 (20.0%)
再発に対する capecitabine 治療歴	あり なし	7 (14.0%) 7 (14.0%)

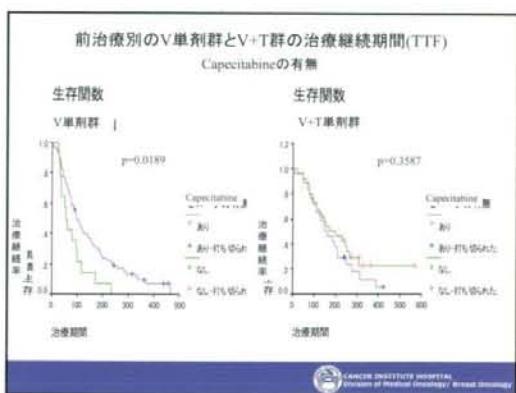
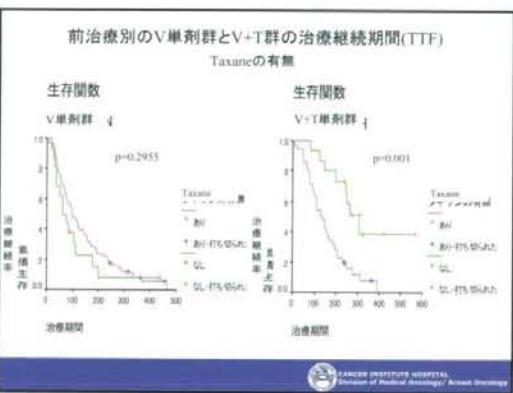
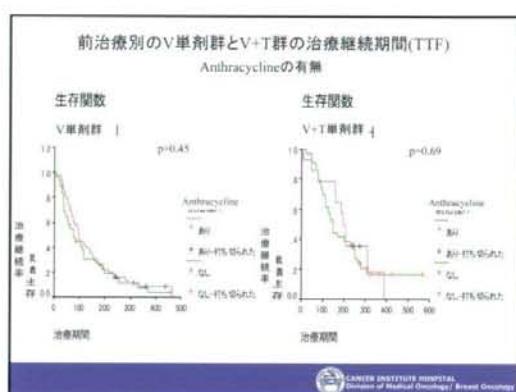
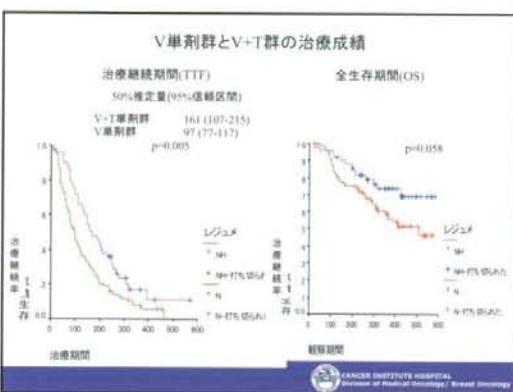
腫瘍効果 V単剤群 (n=80)	
	CR PR Long SD SD PD NE 総効率
総合効果判定	0 0 0 0 0 0 0 0.0%
再発に対する 化療レジメン数	0 0 1 1 3 4 0 12.5%
anthracycline 治療歴	0 0 5 6 31 25 3 7.8%
taxane治療歴	0 0 5 6 3 5 6 1 7.3%
capecitabine 治療歴	0 0 6 7 17 33 25 3 9.1%

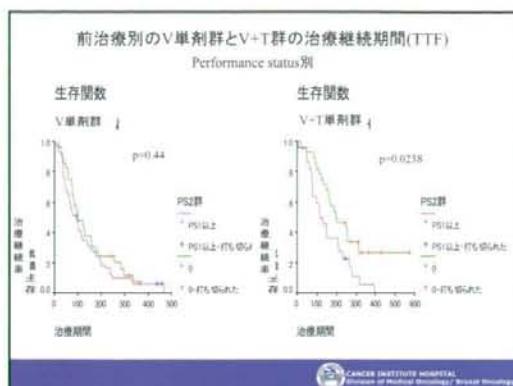
腫瘍効果 V+T併用群 (n=50)	
	CR PR Long SD SD PD NE 総効率
再発に対する 化療レジメン数	0 1 2 3 6 4 0 33.3%
anthracycline 治療歴	0 0 1 2 4 1 1 14.3%
taxane治療歴	0 0 0 2 3 3 0 0.0%
capecitabine 治療歴	0 0 1 5 7 8 1 7.1%

#### 44 転移・再発乳癌に対する vinorelbine 単剤と vinorelbine/trastuzumab 併用療法

副作用 V単剤群 (n=80)					
	Grade				発現率(%) G3以上の率(%)
	1	2	3	4	
血色素量低下	18	14	2	0	40.0 2.5
白血球数減少	17	35	6	0	72.5 7.5
好中球数減少	14	18	20	5	71.3 31.3
発熱性好中球減少症	0	0	3	0	3.4
血小板減少	3	0	0	0	3.4 0.0
GOT上昇	28	5	1	0	42.5 1.3
GPT上昇	22	5	0	0	33.8 0.0
疲労	24	6	0	1	38.8 1.3
恶心	21	7	2	0	37.5 2.5
嘔吐	5	0	1	0	7.5 1.3
表在性静脈炎	0	52	0	0	65.0 0.0
知覚性神経障害	17	7	1	0	31.3 1.3
脱毛	2	0	0	0	2.5 0.0
発熱	15	1	0	0	21.3 0.0

副作用 V+T併用群 (n=50)					
	Grade				発現率(%) G3以上の率(%)
	1	2	3	4	
血色素量低下	11	4	1	0	32.0 2.0
白血球数減少	17	16	7	0	80.0 14.0
好中球数減少	5	10	17	2	68.0 38.0
発熱性好中球減少症	0	0	2	0	4.0 0.0
血小板減少	1	0	0	0	2.0 0.0
GOT上昇	13	2	2	0	34.0 4.0
GPT上昇	16	0	2	0	36.0 4.0
疲労	10	11	0	0	42.0 0.0
恶心	14	5	0	0	38.0 0.0
嘔吐	4	0	0	0	8.0 0.0
表在性静脈炎	0	26	0	0	52.0 0.0
知覚性神経障害	14	5	1	0	40.0 2.0
脱毛	0	0	0	0	0.0 0.0
発熱	11	1	0	0	22.0 0.0





- 結果
- 進行・再発乳癌患者に対して、V単剤群で7.5%、V+T併用群で14.0%の奏効率を示した。
  - Long SDを含むclinical benefit率はV単剤群で30.0%、V+T併用群で46.0%であった。
  - V+T併用群では、V単剤群に比較して良好なTTFとOSが得られる。
  - V+T併用群では前治療歴が少ない症例が多く、特にcapecitabine+Tiに先行してV+Tを先行している症例が多い。逆にV単剤群ではVに先行してcapecitabineが投与されていることが多い。
  - V+T併用群ではtaxaneの前治療歴がない群とPSが良好な群で、またV単剤群ではcapecitabineの前治療歴がある群で有意に良好なTTFが得られた。
  - 治療成績別には、V単剤群で160才未満とcapecitabine投与歴が良好なclinical benefit率を得る因子であったが、V+T群ではそのような因子は見られなかつた。
  - 副作用の発現はV単剤群、V+T群で同等であった。
- CANCER INSTITUTE HOSPITAL  
Institute of Medical Oncology / Breast Oncology

